

関東大震災に学び首都直下地震に備える防災・減災・復興

中林一樹

明治大学特任教授・首都大学東京名誉教授

10万人を超える死者を出した、日本史上最悪の災害は、90年前の1923年（大正12年）9月1日に発生した。前日の台風の影響を受けた気象条件が重なり、木造住宅が30%以上全壊した震度7相当の地震被害が湘南で発生したが、主な被害は猛烈な都市大火となった東京、横浜に集中した。当時の日本国民は6000万人、特殊合計出生率は6点台（つまり当時は6兄弟が普通であった）という若い日本の首都を襲った巨大地震災害であった。「地震だ、火を消せ」とは関東大震災の教訓を端的に示している。

この90年間に、社会的・空間的・機能的に、東京は大きく変化している。それは地震災害の様相も大きく変貌していることを想起させる。木造密集市街地が市街地の全てであった東京とビル化・立体化した都心を木造密集市街地が取り囲んでいる東京、多くの人々が職を求めて田舎から東京に出てきた東京ともはや疎開できる田舎を持たない人々が集住している東京、テレビは勿論ラジオもなかった東京とツイッターやメールが飛び交い東京、東京駅から90分歩くと東京の全てに到達できた東京と50km圏に広がり帰宅困難が多数発生する東京、木造市街地で逃げ惑い多数が犠牲になった東京と都市火災が高層階から出火している都心区域を取り囲む東京、子どもや若者が多かった東京と災害時要援護者が多い東京、世界恐慌に巻き込まれた東京とグローバル経済を混乱させる東京、・・・・・・・・

東京との公表した被害想定（2012年（平成24年））に見る被害とそれが描き出す被災状況とは、どのような震災なのか。被害想定は、倍半分と考えるべきである。その被害は、半分ですむこともあるし、2倍になってしまうこともあると、想定しておくことが大事である。しかし、それは大きな問題ではないかもしれない。なぜならば、東京との被害想定では、東京湾北部地震が冬の夕方に風の強い日に発生すると、30万等の建物の全壊焼失によって自宅を失う人は60万世帯と想定される。倍半分では、30万世帯かもしれないし120万世帯かもしれない、ということであるが、問題はその被災者にあなたがなっているかもしれないことである。被災仲間が多いか少ないかの問題ではなく、被災下人が一人でも、本人には「大災害」なのである。一人ひとりが、どのように被災者にな

らない取り組みをするか。それは被災者が多くても少なくても、自分がやるべきことは同じなのである。

プロフィール

中林 一樹（なかばやし いつき）

明治大学 大学院政治経済学研究科（危機管理研究センター）特任教授

1947年（昭和22年）福井県生まれ。1975年（昭和50年）東京都立大学博士課程退学。東京都立大学・首都大学東京で助手・助教授・教授。2011年（平成23年）から現職。1976年（昭和51年）酒田大火の衝撃で都市防災・災害復興研究を始める。日本災害復興学会会長。東京都防災会議地震部会副会長など。